気づいたら悪の親玉扱いされていたけど今日も元気に頑張りましょう！

体は物語でできている

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

能力（スキル）もしくはアビリティと呼ばれる特殊な力を持った人間が出現してから百年。能力者は社会に溶け込み、世界はそれなりに平和だった。しかし、そんな世の中でも悪の組織と呼ばれるものが存在する。

名無路真白は目的のために突き進んでいたら気が付けば、悪の組織筆頭、そのボスになり魔王だの悪魔だの災害だのと呼ばれるようになっていた。

「まあ、なってしまったものはしょうがない。それより、俺はモテたいんだけどなんでみんな避けていくんだと思う？」

「あなたが怖いからではないでしょうか？」

本人はそこらへんは気にせず突き進む。そんな主人公[悪役]の話だ。

目　次

なんだかみんなが俺を避けてるんだけど ―――――― 1
ロリババアもしくは合法ロリ？ ―――――― 10
男は皆紳士なのですよ ―――――― 15

なんだかみんなが俺を避けてるんだけど

気が付けば、魔王だの悪魔だのと呼ばれていた。いやまあ、自分が警察組織とかを潰して回った自覚はある。邪魔する組織はすべてプチプチしてきたし、敵対者もかなり潰してきた。それはこれからも変えるつもりはないし、正しくないと知っていても俺はやり続けるだろう。

問題はなぜか仲間にまでめちゃめちゃ恐れられているという話だ。話しかければ、逃げられるか、失神される。もしくは警戒される。俺とまともに会話をしてくれるのなんて彼女くらいなものだ。全く納得がいかない。俺は彼らには何もしていないというのに。何であんなに怖がるのだろう。この間もあいさつしただけなのに「すいませーん」って謝られ、そのまま引き返していったし・・・何なのだろう。

そんなことを考えていると、上から火の玉が振ってきた。そう、火の玉だ。

「まあ、意味はないけどさ」

火の玉は俺の半径3メートル以内に入ることがないまま消し去られる。

「ディザスター。貴様を今日こそ捕らえる!!」

気が付けば、俺の周りを３０人余りが取り囲んでいた。ヘルメットに結界石製の大き

な盾。完全装備だ。
「まったく、日曜朝の戦隊ものもびっくりだぜ。こんな人数で、たかが男一人を襲おうとするんだからな。こんなことしていいの？対能力者制圧部隊の隊長さん？」
能力者というものが出現してから１００年。能力者は徐々に数を増やし社会に溶け込んでいった。今では当たり前のように存在している。だが、『能力（スキル）』を持った人間が善良な一般市民だとは限らない。『能力（スキル）』を使った犯罪が昔は横行した。それを防ぐための組織が対能力者制圧部隊だ。彼らは能力者だけで構成された能力者をとらえるエキスパートだ。当然、俺のような人間は目をつけられているわけだが・・・まあ、殺人を許可されていない彼らははっきり言って相手にならない。
「・・・発砲を許可する。撃てぇぇぇぇぇぇぇ」
瞬間、銃弾の雨が降り注ぐ。しかし、まあ能力を発動させている俺には銃弾なんて聞かないわけですべて俺に届く前に消失する。
「皐月!!」
「はい」
皐月と呼ばれた青年が炎の弾丸を飛ばしてくる。さっきの攻撃は彼だったか。
「だけど無意味なんだよな」
炎の弾丸も火の玉もすべて俺に触れることはなく霧散。爆炎と硝煙の匂いだけが辺

りを漂っている。
「クソッッッ」
　隊長らしき人物が苛立った様子で怒鳴っている。だが、状況は一向に変わらない。
「君たちってさ、本当に芸がないやつらだよね・・・学びなよ、能力も銃弾も俺には届かない」
「奴の能力とて無制限に使えるわけではない。攻撃し続けろ!!!!!!」
　うっとうしいので終わりにするか。タイミングを見計らって能力を解除する。
「行けるぞォォォォォォォ」
　隊員がかなりのスピードで突っ込んでくる。俺は嘆息しながらそれを迎え入れた。放たれる拳を躱し、十分に威力の籠った拳で隊員の一人の背中を押し、足を払う。バランスを崩した隊員は、反対側から突っ込んできていた奴に激突した。
　能力者というのは生まれつき身体能力が高いし体も頑丈だ。それは個人差があるものの個人の能力と比例している。だから、能力が向上すれば身体能力も向上する。さっきの隊員はかなり速い動きだったのでかなりの能力者なのだろう。
「けど、この程度じゃなあ」
「ま、まだだ」
「もういいや、君たち。『沈め』」

瞬間、数名を除いた隊員がすべて泡を吹いて倒れた。彼らを襲ったのは、自身を覆う空気が凍結したかのような、痛いほどに冷たい感覚。すなわち、『殺気』と俗に呼ばれるものである。

意識が残っている数名も体が震えていて、立ち上がることさえ困難だろう。

「じゃあね。また今度ね」

そう言って俺はいつも通りの歩調で、倒れ伏す人間の上を歩いて帰った。

「あ、おかえりなさい。ボス」

根城に帰って、最初に出迎えてくれたのは黒い髪にバラ色のリボンをした少女。この組織の幹部、廻栖野　氷雨だ。学校帰りだからだろうか？セーラ服のままここに来ている。

「氷雨ちゃんさ～挨拶してくれたことはうれしいんだけどさ、もう少し警戒心を緩めてくれないかな？」
「あなた相手にそれは無理ですよ。あなたの能力の一つである『気配強化』のせいで、あなたが抑えている殺気や野心、狂気が漏れ出ていますから。生存本能ってやつです。警戒せずにはいられないんです」

「あ～、なるほど。だから、みんな俺のこと避けてたんだね」
「いえ、それを抜きにしてもボスは本能的に怖いんです」
「・・・・・・・」
　偉く傷つくことを言われた。
「でもこの能力便利なんだよ。気配を強化してるから、かくれんぼには不向きだけど制圧するのに向いてるし。さっきも対能力制圧部隊を殺気の増幅で沈めてきたし・・・」
「ボスはその能力がなくても、殺気で人を殺せそうですが・・・」
「いやいや、それは流石に無理だよ」
「・・・そういうことにしておきましょう」
「ところで、センは来ているか？」
「来てますよ。ボスの部屋で、マンガ読んでます」

「了解っと。今日は特仕事ないからグダグダしたら帰っていいよ」

部屋を出て、階段を使って三階分移動する。途中で、「生きていてすいませんでしたー」や「視界に入ってすいません」などと言いながら同じ組織の奴に逃げられたがいつも通りなので気にしないでおこう。

幹部以外は俺の部屋の場所すら知らない。そして、幹部ですら俺の部屋に入ることは禁じられている。この例外を除けば・・・

「おい、千。いい加減俺の部屋でマンガを読むのやめろ。自分の部屋で読めよ」

幹部には、それぞれ部屋が一部屋ずつ用意されており、それはこの女とて同じだ。しかし、この女俺の部屋のベットでマンガを読むことを決してやめようとしない。

「やあ、おかえり。真白。今日はずいぶん早かったね」

俺と相対しているのにもかかわらず、この女には警戒という二文字は存在しない。もはや、可愛いなんて言葉では表せないほどの絶世の美女なんて言葉じゃチープすぎて話

にならないほど美しい容姿をしているこの少女は、相も変わらず制服のまま俺の方すら向かずに寝転がっている。思わず蹴り飛ばしてやりたい衝動に駆られるが、俺が蹴り飛ばす前に千はマンガを持ったまま寝返りを打ちこちらを向いた・・・。

「散歩帰りにしては硝煙の匂いが強いな～。君、また襲われたのか」

「お前が俺に与えた『気配強化』のせいで、目立つんだよ」

俺がそういうと、彼女はキョトンとした顔でこちらを見てピンク色の髪を振り乱して大笑いし始めた。

「プッハハハハハハ、何だい？君、『気配強化』がなければ襲われないとでも思っているのかい？傑作だ。君は確かに『気配強化』によって目立つようにはなったけど、君はどうせこの国最大のお尋ね者だよ？『気配強化』をなくしてもそれは変わらないよ」

「・・・・・・」

「でも、そうだな～。君がそんなに嫌なら回収してあげるよ」

そう言って、千は俺の首筋にかみついた。瞬間、焼けるような痛みが首筋から全身にかけた。

「いッッッて――――」

「そんなに涙目になるなよ、もっと虐めたくなるだろ」

痛みに悶絶する俺にそんなことを言い出すこの女はやっぱり最悪だ・・・容姿以外は。

「ほら、感じるだろ？『気配強化』は奪っておいた。代わりに、『瞬間移動』を与えた。うまく使うんだよ」
「・・・・・・それは感謝するけどさ・・・噛みつく必要あるのかよ」
「仕方がないだろ。この能力は対象の体液が必要なんだから」
「・・・使い勝手が悪いな」
「まあね、我ながらそう思うよ」
　全く反省の色が見えない千をを見ながら、傷口に包帯を巻く。毎回思うが、もっと優しくできないのだろうか。いや、たとえできたとしてもこの女はそんなことしないだろう。じくじくと痛む腕をさすりながら、楽し気に笑みを浮かべる千に悪態をついた。
「このドＳめ」
「そんなこと言うなよ、こ～んなに美少女なのにさ」
「・・・・死ね」
「あは、勘弁しなよ。あんまり強がると虐めたくなっちゃうからさ」
　このままいくと、勝ち目のない喧嘩が始まりそうなので話を変える。
「ハァ～、ところでお前学校に行かないのに何で制服着てるの？」
「ん？可愛いからだよ。後、君の反応が面白かったから」
「お前、俺で遊んで何が楽しいんだよ」

「楽しいよ、いろんな意味で」
「・・・ハァ～」
　こいつはまあ、昔からこんな感じだししょうがないか。諦めたほうが速い。
「あ、そうそう・・言い忘れてたけど、明日から私、君の高校に転校するから。よろしくね」
「は!?」

　俺は何を言われたのかわからまかった・・・というより理解したくない・・・。

ロリババアもしくは合法ロリ？

「お前が高校に行くとか冗談だろ。お前が高校に行く必要なんてないだろ」
　そもそも千に高校で学べるものはない。俺に高校の勉強を教えているのも千だし、必要知識を与えてくれたのも千だ。
「一回行ってみたくなったのさ。高校」
「・・・お前何歳だっけ？」
「２００から先は数えてない」
　あっけらかんと答えるロリババアこと名無路　千。あまりにあっけらかんというのだから、思わずスルーしそうになる。
「知ってるか？高校は１５～１８歳が通う場所なんだぜ？」
「それとこれとは別問題だ」
「・・・千がいなくなったら、誰が俺に勉強を教えてくれるんだ？」
「そもそも君、１６才だろ？学校行っててもおかしくないだろ？一緒に行こうよ。ていうか行くぞ」
「・・・学校の授業は肌に合わない。それに拘束時間が増える。俺の最終目的を知ってて

それを言うか?それにどうせ学校に行ったら俺の周囲の人間は泡吹いて気絶するぞ」
　中学一年生の入学式、俺がまだ千に拾われて一年もしない頃。出席した人間をすべて気絶させるという漫画の主人公もびっくりな事態を起こしたことがある。気配強化の制御ができておらず、オーラが色々漏れ出ていたらしい。俺のオーラが人を昏倒させるだなんて意味不明だが・・・。それ以来、元々千に教えてもらっていたほうが色々な意味でうまくいっていたため学校には行かなかった。まあ、裏ルートで学校は卒業したことにしたし、高校にも籍だけはあるが・・・。
「その心配はない。この私が君の『気配強化』を奪ったんだよ?」
「・・・」
「それでも不安なら、私の近くにいるときは君の漏れ出てるそのオーラを隠してあげよう。なに任せ給えよ。これでも、私は完璧無敵の美少女だからな」
「ハッ、ロリババアの間違えだろ」
　ガンッ!
　鈍い音とともに、俺の額は地面に激突した。否、千の踵落としによって地面に『叩きつけられた』っの方が正しいのだが。
「学校の授業が肌に合わないなら、変わらず私がここで教えてやる。時間に関しては私がここに帰ってきてからの時間の流れをゆっくりにしてあげよう。これなら問題ない

だろ」

逃げ道がどんどん塞がれていく。このロリ・・・少女なら時間の流れぐらい簡単にいじれるだろうし、変わらずここで勉強を教えてくれるだろう。確かに問題点はなくなった。しかし・・・

「解せないな、お前何でそこまでして学校に行きたいんだ?それに何で俺まで連れていきたいんだよ」

「これからの君の目的のために役に立つからっと言えば信じるのか?」

・・・微妙なラインだ。だが、千が今まで俺に俺の不利益になるようなことをさせたことはない。

「分かった、行くよ、行けばいいんだろ」

「ふむ、よろしい～」

口角を上げ、美しく微笑む千を見上げながら言った。

「足退かしてくれない?」

頭を千に踏みつけられたままでは色々格好がつかない。俺は大人しく懇願することにした。

「あ、今日のパンツは藍色のレースだったな」

グシャ――――――ー
鳴ってはいけない音が部屋に響いた。

「さて、高校に行くにあたってあの男に会いに行かないとな」
俺は、高校に千を入れるための段取りを考え始める。
「ああ、笹野原だっけ」
「そうそう、笹野原　景士。能力者を育てるためだけに作られた開発地区。創設者にして、先端学園理事長。そして、世界でも五本の指に入る能力者だ」
分かりやすく肩書を言ったが、やはりとんでもない男だ。
「５０年ぐらい前に作られた場所だろ？結構最近だよね」
「５０年を最近なんて言うなよ・・・」
「あ、思い出した。君を雲来中学にねじ込むのに協力したあの小僧だね」
あの時すでに７０歳近かったあの男を小僧呼びとか・・・。

「開発地区に行くのは少し面倒くさいな」
「まあ、明日にでも行けばいいだろ。漣の『空間転移』でひとっ飛びだし」
幹部の一人であるあの男を思い浮かべる。かなり気難しい奴だが、仕事だといえば従ってくれる。
「・・・まあね」
「不在の間は繊細さんに働いてもらうか」
「なら今から頼みに行ったほうがいいよ。繊細　逃人はもう少ししたら就寝時間に入る」
「了解、じゃあ、今から頼みに行ってくる。ついでに夕飯も買ってくるよ」
そう言って俺は、財布をもって部屋から出て行った。

男は皆紳士なのですよ

花粉の猛攻が終わって、平和に夏に向かって進み始めた五月。今日はまだ梅雨の前なのに、夏の盛りを思わせるような暑い日だった。

「最近は異常気象というが本当みたいだね」

「もはや誰かの能力で人為的に起こされているんじゃないかと思えるほど暑いな」

気温は２５度。とても梅雨入り前の気温とは思えない。この状態で梅雨になり湿度が上がったらシャレにならない。

何故俺らがこのクソ熱い中徒歩で開発地区に向かっているかと言えば、原因は三時間ほど巻き戻る。

三時間前

「漣ちゃんいる？」

そこは冷ややかな薄暗闇に包まれている。夜にしては明るすぎるし、昼にしては暗すぎる。その奇妙な薄暗闇に包まれるとき、人はまっとうな方向と時間を見失ってしま

う。人の方向感覚を狂わせる闇。彼の直属の部下であるあのヤンデレちゃんに作らせたのだろう。

「・・・今就寝中なんですが、何の用ですかボス」

ぐぐもった声が返ってくる・・・かなり不機嫌そうだ。ちょっとまずったかな。昨日の夜に帰ってきたという報告が来てたから、５時間ぐらいは眠っていたはずなんだけど。

漣は寝不足だと人が変わったかのように機嫌が悪くなる。一度徹夜明けの彼の睡眠を邪魔して半殺しにされた部下がいるらしい。彼の空間転移はかなり厄介な能力で攻撃に使うとかなり無残な死体が出来上がる。

「・・・空間転移で俺らをある場所に飛ばしてほしいんだけど」

「あと３０時間寝たらいいですよ」

いやそれもう一日たってるじゃん・・・どんだけ眠いんだよ。ここでごねると彼の怒りを買って殺し合いになりそうだしな・・・。

「・・・分かった今回は諦めるよ」

ということがあった。

「ていうかさっきから、熱くなさそうだなと思ったら能力使ってやがるな」
「この繊細な僕に炎天下の中を歩けというほうが間違っているのさ」
色々と突っ込みたいことが発生したが・・・一番引っかかるのは一人称が変化していることdあ。
「一人称が『私』から『僕』に戻ってるのはどういう心境の変化だ？」
「分かっていることをあえて聞くのは無粋というものだよ」
昔千の一人称は僕だった。　しかし俺が組織を立ち上げたと同時に、一人称を私に変え　俺の行動や方針に対しても口を挟ま、くなった。きっと彼女なりのポーズだったのだろう。一人称を僕に戻すということは　これに対して干渉をするという意思表示だろう。
「・・・俺も千の能力で冷やしてくれよ」
「なあ」
「何だよ？」
「思ったんだけど、君は僕から昨日『瞬間移動』を受け取ってなかったけ？」
「受け取ったけど、一度も使ったことがない能力をこんな場所で使う気にはなれないな」

「失敗したら、この僕が何とかしてあげるから使いなよ」
一見、親切な言葉だが、その笑みは放送コードに引っかかるレベルで邪悪だ。
「・・・どうすればいい？」
「私は君につかまっているから、全力で飛びなさい」
「・・・了解」
「方向は北北西だ」
指示通りの方向に俺は飛んだ。
瞬間、凄まじい風圧が体全体を襲う。数秒後、固い何かを突き破り床に激突、轟音が鼓膜を打つ。
二三回転した後、壁に衝突して止まった。
「痛ってー」
「ふむ、うまくいったみたいだね」
「何処がだよ!?」
「ちゃんと目的地には着いたじゃないか・・・僕が助けなければ死んでたけど」
「おい・・・」

中を見回すと、やはり最初に目につくのは隙間なく置かれた本棚だろう。几帳面なぐ

らいにジャンルとサイズとで区別され、かつ日差しに焼かれないよう窓からの角度も配慮されている。スライド式の本棚にはざっくりと２０００冊ほどの蔵書がある。机に置かれた純銀軸の万年筆や、ギロチン式のシガーカッターも実にセンスがあり、めちゃめちゃ仕事のできる男の仕事部屋と言っても遜色はない。

「相変わらず、君たちは騒がしいな。扉から入ってくることができないのかね？」

後ろに人の気配を感じ、振り向こうとした瞬間声を掛けられる。

ゆっくりと後ろを振り返ると、そこに立っているのは初老の男性だ。最初に目につくのは、長く生えそろいどこぞの校長先生を彷彿とする髭だ。だが、それは俺がこの男に慣れてしまったからだろう。本来であれば、この男の鋭い眼光を受け意識を保つことすら難しい。俺の『気配強化』による威圧と同じことを素手やっているといえば、どれだけ化け物時見ているか分かるだろう。最初に会った時は、死神がお迎えが来たのではないかと錯覚するほどだ。驚くほど、長身でありその上こちらが座っているので余計にデカく見える。この男こそ、笹野原　景士そのひとである。

「わざとじゃない」

「・・・開発地区に不法侵入できる輩は君らくらいじゃよ」

「今回はわざとじゃない」

嘆息する理事長をスルーして言い訳をかます。
「それにしても相変わらず、発展途上の胸ですのぉ～」
俺の横に立っていた千を見て、嘆かわしそうに首を横に振った・・・瞬間、俺の横に床から足が生えた現代アートが完成した。
「り、理事長ー!?・・・おい、千。幾ら図星をつッ!?」
危険を感知し、瞬時に立ち上がり横に飛ぶ。
ズン!
凄まじい音とともに、罅を入れて床が陥没した、否、床が抜けかけている。
「君たちはあれかい?二人揃うと僕にセクハラをしないと気が済まないのかい?」
「いえいえ我々男は皆紳士ですから。消して嘘は付きません!小さいのも大きいのも好きな人生でした!!・・・あ、でもやっぱり大きいほうがッ」
いつの間にか復活していた理事長が俺の横で叫ぶ。まあ、今度は床が無事では済まなかったけど。
大穴が開いて、悲鳴が聞こえる中千が溜息を吐く。
「相変わらず、あの男は変態だな」
まったくもって同意だ。
「大きければいいなんて邪道だ」

「君ももう一回行っとくかい？」
　半ギレの千が蹴りを放とうとしたところで、理事長が帰ってきた。
「すまんの、茶を持ってきた。まあ、座ってくれ。ソファーは無事じゃろうし」
　何事もなかったかのように、傷一つなく和服を着こなすこの男。いろんな意味で、変態だ。何をどうやったら、あんな蹴りをもらって無傷で笑ってられるのか。
「湯呑を三人分と編入書類を持ってきたってことは、俺らの要件は分かってるんだな」
「伊達に長生きはしておらんからの。確かに君らのような人間が学校に通うなら、開発地区が一番都合がいい」
「じゃあ、その話はここまでいいや。俺と千を同じクラスにいれることが絶対だ。それ以外はそちらで決めてくれて構わない」
「ええ、了解しておりますよ。フォフォフォフォフォフォフォ」
　どこか芝居がかった笑い方が、いちいち人の神経を逆なでる。
「じゃあ、俺らは茶を飲んだら帰るから」
　隣に座っている千がそろそろ限界だし。結構機嫌が悪そうだ。
「では、儂は仕事に戻らせてもらうとするかの」
「仕事？」
「第二研究所で近々、ある研究が完成するそうなのじゃよ。その視察じゃよ」

「計画は順調ってわけか」
「ああ、儂がここを作ってから五十年。ようやく完成の兆しが見えてきたのじゃ」
この老人はぱっと見温厚そうに見えるが、本性はきわめて合理的かつ冷酷だ。例外を除けば、何のためらいもなく人を殺すだろう。今浮かべている笑みだって、人に見せられるものではない。
「『リベリオン計画』っか。世界に喧嘩を売る意味では俺の計画と似ているな」
理事長がいなくなった部屋で一人ごちる。そんな俺を千は笑みを浮かべて見つめていた。